

アイヌ民族は狩猟民族としてのイメージが強いのですが、海洋での漁労にも優れていました。アイヌ民族の漁に関してすぐ思い浮かぶの



漁労

佐賀 彩美 (さが あやみ)

アイヌ語地名研究会

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モンレー国際大学院(現ミドルベリー国際大学院モンレー校)通訳翻訳学科修士課程修了。通訳案内士。

はサケ漁です。これは川に遡上するサケを捕獲していたのに対し、海での漁も食料確保の手段として大切でした。漁に出かける浜辺にはピスヌサ (pis-浜 un-にある nusa-幣棚) と呼ばれる祭壇が作られ、海全体を掌握し豊漁に導くという龍神、その使者としてのレブンカムイ (rep-沖 un-に住まう kamuy-神) 即ちシャチ神が祀られていました。シャチは獲物を追い込んでくれる位の高い神として崇敬されていました。アイヌの人々はシャチの雄が沖合を、雌が沿岸を担当し、雄の方が位が上と考えていましたが、実際は雌の母子集団がリーダーです。シャチが岸辺に現れるのは、神が人を見守るために領海をパトロールしていると考えられていました。また、シャチは甲高い声でキーキーと鳴きますが、それを聞くと人々は、ヨモギを取って家の炉辺にくべて煙を立て、その一部は海辺に投げ散らしました。一種のお清めの行事であったかもしれません。シャチの声が止んで浜に出ると、シャチに追われた魚が岸近くで飛び跳ねていて、人々は手づかみで魚を獲ることができると言います。

また、漁労の獲物として代表的なのが、メカジキです。アイヌ民族はメカジキやサメ、イルカときにはクジラなど大型の魚を捕るため勇壮な漁を行っていました。アイヌ語ではシリカッ (si-本当に rika-脂身のある p-もの) =メカジキの漁は太平洋沿岸の各地で盛んに行われました。メカジキ漁の季節の始まりを告げるのは、体長2~3cmのシリカッキキリ (sirikap-メカジキの kikir-虫) です。茶色の体に白い筋が縦長に走るところからシロスジコガネといいますが、孵化して盛んに飛びまわる頃に、メカジキが回遊してくるので、その名前がつけました。メカジキ漁に使われていたのは、柄の長さが、3~4m以上もあるレパオナ (repa-沖漁(用)の op-槍) という投

げ鉞で、勢いよく空中へ放り投げると弧を描いて飛んでいき、鉞先が獲物に突き刺さると柄は外れるようになっています。獲物が動くほど、鉞先が体内に潜って

抜けなくなるという仕掛けです。日本語では回転離頭鉞と名付けられているそうです。この手製の巧妙な道具を使って、最大4mほどもあるメカジキを獲っていたことは驚きです。

メカジキを仕留めたら、浜まで牽引し、近くに生育するイタドリを刈り取って砂上に敷き並べ、その上で解体し、身を切り分け、家族の人数に合わせて、特に高齢者へは細かく叩いて、各家庭に配分しました。非常に脂肪の多い魚なので、切り身を肩にかつぐと、衣服も油まみれになってしまう大変な作業であったと言います。身だけではなく、皮も細かく刻んで長時間煮て、強力な接着剤である膠を作ったり、煮凝り料理の材料としました。また、皮を干している絵も残っているので、乾燥させた皮を何かの用途に使っていたと思われます。

ところで、メカジキ漁をするのは、陸地を離れ、水平線に陸地が沈み込み、全く陸の見えない大波の外洋で行うので、コンパスなどなかったアイヌの人々は、どのようにして海上で自分の位置を確認したのでしょうか。それは山立てという一種の三角測量を行っていたのです。沖合では、太陽の位置を確認し、陸へ近づくとも水平線の彼方から、海浜近くの山が見え、その後から高山が見えてきます。その山々の位置を使って山立てをしていたのです。つまり、自分の位置から見える山の形や大きさで現在地を割り出し、迷うことなく集落のある浜に戻りました。そうしたことから、アイヌの人々は地球が球体であることを知っていました。生活のなかで何よりも大切な食料調達を効率よく行うため、アイヌ民族は動物の挙動や自然景観を細かく観察し、得られるあらゆる情報を駆使していたといえましょう。

*本稿は、アイヌ語地名研究会会長、藤村久和先生を講師として(一社)北海道開発技術センターが自主事業として実施しているアイヌ文化勉強会の内容を、藤村先生監修の下、筆者が取りまとめたものです。

藤村 久和 氏 北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般(精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療(整体ほか)等)を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践している。また、アイヌ民俗文化財調査(北海道教育委員会)に従事し、道内に居住する古老の伝承話の聞き取り作業を行い、その成果が例年報告書として刊行され、資料篇等も随時刊行している。近年は、食育コーディネーターとして北海道の食育計画にも参画する。主な著書:『アイヌの霊の世界』(小学館、1982年)、『アイヌ、神々と生きる人々』(福武書店、1985年)、『アイヌ学の夜明け』(梅原猛氏との共編、小学館、1990年)、『アイヌのごはん』(監修、デーリマン社、2019年)、『平成20~令和3年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1~13』(北海道教育委員会、2008~2022年)等。